東方幻想境

♪KANZ♪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東方幻想境

【Ｎコード】
Ｎ２１２５Ｙ

【作者名】
♪ＫＡＮＺ♪

【あらすじ】
幻想郷……。幻想となった生き物の楽園。外の世界とは『博麗大結界』によって隔離された世界。
その世界には弾幕なるものが存在し、人間と妖怪が平等に闘えるように、
『スペルカード』というカードを使うルールが採用されていた。幻想郷に住まう彼は一体何を見るのか。これは『霊夢に人間であるための構造以外を吸い取られた程度の能力』を持つ少年の物語。
処女作品であり、他の小説サイトからの転載ではありますが、どう

か暖かい目で見て頂けると幸いです（生温い目は、困ったものです）。追伸：幻想入りではないので、あしからず。

それでは『幻創境伝』をお楽しみ下さい。

プロローグ（前書き）

注意する事！

この作品はシリアス２、バトル２割、ハーレム６割でお送りしております。

苦手な方はご遠慮下さい。

プロローグ

「……んっ」

かなりダルそうに布団から這い出た紅白の、しかし脇の部分がないデザインの巫女服を着た、短めに切られた黒髪を大きな赤いリボンで止めている少女――こと博麗霊夢は、これからしなければならない家事、炊事、掃除などの事を思い、

「……はぁ」

かなりめんどくさそうに、盛大なため息を吐いた。

数分間布団の上でボーっとして過ごし、眠気に負けそうになる体を、頬を何度か叩いて無理やり起こす。大きく息を吸い、

「よし、今日も頑張るのめんどくさけど、頑張らないとね」

中途半端な気合いを入れ、自室を後にした。

「うん、中々の出来ね」

朝食の味見をして、満足げに頷く。完成した料理を居間に運び、朝食をいただく――のではなく、テーブルに料理を並べると、居間を後にして一つの部屋を目指し、足を進めた。

目的の部屋の前に着き、「まだ起きてないのね……？」とため息を吐いてから、スパンと勢い良く襖を開き、

「起きなさい、霊耶！」

未だに夢の中へと旅立っている同居人に、目覚めの声をかけた。

『霊夢に人間であるための構造以外を吸い取られた程度の能力』（前書き）

その男『霊夢に人間であるための構造以外を吸い取られた程度の能力』を持つ。

『霊夢に人間であるための構造以外を吸い取られた程度の能力』

「……んぁ」
ん？　誰かが呼んでる。
そんな事を考えながら目を覚ましたこの男、博麗霊耶は、ダルそうに布団から這い出て、
「……はぁ」
今日という一日が始まった事にため息を吐いた。
肩辺りまでの黒髪をめんどくさそうにガシガシと掻き、辺りを見渡す。
「いつまで寝ぼけてんのよ、アンタは」
「あ、おはよう姉さん」
そう、彼は霊夢の弟なのだ。
双子の。
「はい、おはよう。だからさっさと起きてきなさい、ご飯が冷めるわよ？」
それだけを伝え踵を返し「はぁ、あんなめんどくさがりな性格、誰に似たのかしら」と呟きながら部屋を後にする霊夢を、ボーっと見送る霊耶。
数分後、ようやくもぞもぞと動き出し、
「……寝よ」
温い布団に、身を委ねた。

「……ごちそうさま」
「お粗末様」
そう言って、テキパキと皿や茶碗を片付ける霊夢。
数分前、二度寝という幸福至極な生活を送っていた霊耶は、床が陥没するほど素晴らしい霊夢の鉄槌を顔面に受け、起床した。
そのため案の定、霊耶の顔はボッコボコだ。
「霊耶」
洗い物を終え、居間に戻ってきた霊夢が話しかけてきた。
「そういえば今日、魔理沙と遊ぶ約束してなかった？」
霊夢の言葉に暫しの沈黙。
「……あ」
やがて小さく呟いた。
「はぁ、また忘れてたのね？」
呆れたようにため息を吐く霊夢。彼女の態度から察するに、霊耶の忘れ癖はどうやらいつもの事らしい。
そんな霊夢に、ムッとした表情の霊耶が言葉を返す。
「もっと早く起こしてくれなかった姉さんが悪いんじゃないか」
「なんてニート発言よ……」
これもいつも通りなのか、頭を抱える霊夢。お茶淹れるね、と霊夢をスルーした霊耶は、湯飲みにお茶を入れて霊夢の前に差し出す。
「あっ」
しかし不意に自分の方へと戻し、自分の湯飲みを霊夢に渡した。

「どうしたの？　自分の湯飲みを使えばいいじゃない」
霊夢の質問を「いいからいいから」と誤魔化し、お茶を啜る。
首を傾げながらもお茶を飲もうと顔を近付けると、

「……あっ」

茶柱が立っていた。
霊耶に顔を移せば、霊夢が気付いていないと思っているのか「いい天気だねぇ」と暢気に外を見ている。
暫く霊耶を見つめていたがそんな、変なところで気を利かせる弟を見て、霊夢は小さく微笑み、

「そうね」

雲一つない、快晴の空を見上げた。

――今日は何だか、いい事が起こりそう。

そんな予感がした霊夢だった。

快晴の空の下、草木が風によってざわめく音を聞きながら、縁側に座りお茶を啜る。
「はぁ、いい天気だけど……ちょっと暑いな」
「アンタは外に出なさ過ぎだから、そう感じるのよ」

灰色の甚平を着て、昔境内に落ちていた天狗の団扇で扇ぎながらそんな事を言う霊耶に、箒を持って歩いてきた霊夢がため息を吐きながら言葉を返した。
案の定、天狗の団扇で扇いでいた霊耶の髪は、暴風でも受けたかのように乱れまくっていた。
「姉さんはいいじゃないか。その巫女服、脇ないんだし」
「うるさいっ」
脳天にチョップを食らった。
イテテ、と軽く頭を擦りながら霊夢を見る。
「酷いなぁ、事実を言っただけじゃないか」
「ダメなものはダメなの」
ちぇっ、とふて腐れる霊耶だったが、不意に口を押さえた。
「コホッ、コホッ……」
数回咳をして、止まったのか深呼吸をする。
「霊耶、大丈夫……？」
霊夢が心配そうな顔で、霊耶の背中を擦る。
「大丈夫だよ、姉さん。ちょっと噎せただけだから」
不安そうな顔で見てくる姉に苦笑しつつ、安心させようと話しかける霊耶。
「待っててね、今、薬持ってくるわ」
動かないで、と釘を打ち家の中へと入っていった姉に、　霊耶は再び苦笑するしかなかった。

霊耶に飲ませる薬を探しながら、霊夢は考える。
霊耶は、力としては何もないただの人間。
しかし能力は持っており、それが自分を苦しめている。
『霊夢に人間であるための構造以外を吸い取られた程度の能力』

一見ふざけた名前の能力だが、自分には確かにそう“視え”、生まれながらにしてその能力を持っていた霊耶は、実際にその能力によって蝕まれている。
双子で産まれたのが運のつきというのか、霊耶の能力は母親のお腹の中で既に現れてしまったらしい。
霊耶の能力、つまり自分が霊耶から奪ったのは霊力だけでなく、人間であるための構造……つまり、人間が生きていく上で必要な最低限の機能以外を霊耶から取ってしまった。最低限の食事、呼吸、血液、治癒力しかない。
体内で上手く温度の変化に対応出来ず、季節の変わり目には体調を崩してしまう。
生存本能はそのままのため、回復させようと睡眠に貪欲となる。
悪い言い方をすれば、いつ死んでもおかしくない、という事だ。
さっき「霊耶は外に出なさ過ぎる」と愚痴を言ったが、本当は霊耶が外に出ないのではなく、自分が霊耶を外に出さないようにしていた。
霊耶の場合、掠り傷が致命傷になりかねないからだ。
朝の鉄槌は、唯一霊耶の安全が保証されている攻撃らしい。
霊耶自身自分の能力は知っており、自分の口から霊耶に能力を教えた時、彼は「それで姉さんが元気でいられるなら、僕は幸せだよ」と笑顔を浮かべていた。
そんな、自分を慕ってくれる弟に何も出来ない自分に腹が立ち、歯痒くなるが、とにかく今は霊耶の能力を取り除く方法を探すしかない。
目的の薬を見つけ足早に、暢気に縁側で空でも見ているであろう弟の元に向かう。
目の端に光る、小さな滴を拭って。

鳥か？　飛行機か？　いや、魔法使いだ！（前書き）

恋泥棒との邂逅、だぜ。

鳥か？　飛行機か？　いや、魔法使いだ！

霊夢から薬をもらい、だいぶ楽になった霊耶は、再びお茶を入れて隣に霊夢が座り、二人でのんびりと空を見上げていた。

「ん？」

不意に霊夢が呟いた。

霊夢を見れば、目を細めてある一点に集中している。つられて霊耶も視線を向ければ、空の遥か彼方に、徐々に大きくなる一点の黒が見えた。

鳥か？

だが、鳥にしては速度が速すぎる。

飛行機か？

この幻想卿にあるはずがない。

ならば……、

「魔法使いだ」

「はぁ……」

霊耶はただ、人と視認出来るまで近くなったそれを見つめ、霊夢はこれから騒がしくなる事にため息を吐いた。

「おはよう。霊夢、霊耶」
「おはよう、魔理沙」
「素敵なお賽銭箱はあっちよ？」
目の前に降り立った、大きな黒いとんがり帽子を被り、黒い服の上に白いエプロンを付けている金髪の少女、霧雨魔理沙は霊夢の言葉を無視しすかさず彼女が飲んでいた湯飲みを取り、一気に飲み干した。
「ふぅ……飛ばしてきて喉が渇いてたから、助かったぜ」
空になった湯飲みを戻し、ニヒルな笑みを浮かべる。
「ちょっと、勝手に飲まないでよ」
「霊夢、お茶飲ませてもらったぜ！」
「遅いわよ……」
いつも通りのやりとりをしてから、魔理沙は霊耶に顔を向ける。

「霊耶は相変わらず引きこもってるみたいだな。私よりも肌が白いんじゃないかしら？」
「ははっ……魔理沙も相変わらずだね」
随分な言われようだが、長年言われているため苦笑で済ませる霊耶。
会話の流れのまま魔理沙は何か思い出したのか、ポケットを漁りだした。
「そういえば霊耶に渡すものがあったんだよ」
これだ、と一つの茸を見せてくる。
「これは？」
首を傾げる霊耶に魔理沙は笑顔で、
「何の茸か分からないから食べてみてくれ！」

「……あはは、ホントに相変わらずだね」
今までも何度か怪しい茸を食べてみろと実験台にされそうになってきたが、今回は最上級に怪しい。寧ろ何もない訳がないと主張しているかの様な虹色をしているのだから。
苦笑いしながらもどうやって断ろうか考えていると、
「止めてッ！」
「えっ……？」
魔理沙の頬に、パシンという乾いた音が響いた。
「れ、霊夢……？」
状況が把握出来ない魔理沙は、叩かれた頬を押さえながら呆然と霊夢を見る。
霊耶もまた、悲しそうな表情で霊夢を見ていた。いつもは霊夢がいない二人だけの時にこの話題がきていたため、すっかりと姉の存在を忘れていたのだ。
魔理沙の頬を叩いた手を押さえながら、霊夢は背を向けた。
「ごめんなさい、叩いた事は謝るわ。でも、例え食べさせる気がない悪ふざけでも霊耶に安全が保証されてない物を、食べさせようとしないで」
頭を冷やしてくる、そう言って裏の方へと霊夢は歩いていった。
沈黙が辺りを支配する中、霊耶は小さく息を吐く。
「……魔理沙、話があるんだ」
呆然と、霊夢が歩いていった方向を見ている魔理沙に声をかけた。
「……何だ？」
すぐには立ち直れないようで、力ない声で返してくる。
「少し長くなるかもしれないから、中で話すよ」
そう言って魔理沙の腕を掴み、少々強引に居間へと連れていく。

居間でテーブルを挟んで座り、今は霊耶の話を聞く事を優先したのか、真剣な表情で魔理沙が霊耶の言葉を待っていた。
そして、やがて霊耶が口を開く。
「魔理沙、僕が何の能力もない人間だって事は、姉さんから聞いてるよね？」
「ああ」
唐突のない開口一番だが即答した魔理沙と、視線を逸らさずに言葉を続ける。
「実はそれ、嘘なんだ」
「は？」
ここで初めて魔理沙の表情が崩れた。
理解出来ていない表情の魔理沙に、的確な言葉を贈る。
「つまり、僕は能力を持っているんだ」
事情があって今まで言えなかったけど、と付け足す。
「……なるほどな。じゃあ、どんな能力なんだよ？　言えないって事は凄い能力なんだろ？」
目をキラキラさせ、身を乗り出してくる魔理沙に苦笑しつつ、お茶を一口啜ってから口を開く。
「『霊夢に人間であるための構造以外を吸い取られた程度の能力』」

「霊夢に人間で……何だって？」
覚えきれず聞き返してくる魔理沙に苦笑しつつ、もう一度言う。
「『霊夢に人間であるための構造以外を吸い取られた程度の能力』だよ」
「……それは、どういう能力なんだ？」
覚えきれず、諦めたらしい。
「詳しくは僕も分からないけど……強いて言うなら、今の僕には人間が人間として生きていくために必要な、最低限の機能しか備わっていないって事だよ」
「お前ッ、それって……」
今の説明で、いかに霊耶が危険な状態か理解出来た魔理沙は驚いたような、色々な感情が混ざった表情で霊耶を見てきた。
そんな魔理沙に霊耶は笑顔を浮かべる。
「僕は大丈夫。話したりご飯を食べたり、歩く事だって出来るんだ。それに、もしかしたらこの能力のお陰で姉さんが元気なのかもしれない。これ以上望む物はないよ」
声や表情に暖かみはあるが、まるで他人事の様に淡々と話す。
「だけど、それじゃあ霊耶が……」
そんな霊耶に構わず最早泣きそうな魔理沙に、笑みを浮かべる。
「ありがとう、魔理沙。僕には姉さんの他に、知り合いは魔理沙しかいないからね。魔理沙が毎日来てくれる、それだけで僕は幸せだよ」
本心からの言葉に、魔理沙は何も言う事が出来なかった。

霊耶との話を終えて寛いでいると、暫くして霊夢が戻ってきた。
「霊耶ー、お昼御飯何がいい？　って魔理沙もいたのね……どうせアンタも食べてくんでしょ？」
めんどくさそうな顔で聞いてくる。
いつも通りの態度で接してくる霊夢が今は、無性に腹が立った。

「霊夢」
霊夢の前に立ち上がる。
「早く決め――ッ！？」
「魔理沙！？」
いつも通りのめんどくさそうなだらけた半目て話す霊夢の言葉を遮り、思い切り頬を叩いた。平手打ちだが一切と力は抜いていない。
霊耶が驚いたような声を上げていたが、今はそれに構っている暇はない。
暫く呆けた顔で叩かれた頬を押さえていた霊夢だが、やがてゆっくりと立ち上がる。
「ったいじゃない何すんのよッ！　さっき叩いた事は謝ったじゃない！」
ギリッと奥歯を噛み締めた音と共に掴みかかってきた。
「ああ！　さっきのビンタのとは関係ないな！　ただお前がムカついたから叩いたんだ！」
怒りの形相にも負けずこちらも霊夢の服に掴みかかる。
私の言葉に霊夢は手の力を強めた。
「ふざけんじゃないわよ！　何でそんな理由で私が叩かれなきゃないのよ！」
霊夢の意見は最もだ。冷静になってから考えれば明らかにこちらが悪い。
霊夢はこちらの怒りの理由が解らないのだから、これはただの八つ当たり。
だが例え八つ当たりだと分かってはいても、抑えることは出来なかった。
「何で霊耶の能力を黙ってたんだ！」
今まで何でも話し合える親友だと思ってたのに。せめて私くらいには教えて欲しかった。
私の言葉に霊夢は目を見開くが、すぐに睨み付けるような視線に戻し、

「うるさい！　アンタなんかに関係ないでしょ！」
霊夢の言葉に、思わず掴んでいた手の力が抜けた。「霊耶の事は私に任せて、アンタは気にしなくていいわ。分かったらさっさとどけて」
霊夢は邪魔と言わんばかりに私を払いのけ、台所に歩いていく。
「姉さん……」
泣きそうな表情で霊耶が霊夢を見上げた。
「大丈夫よ、霊耶。私が必ず治してあげるわ」
声をかけた霊耶に微笑み、再び台所へと歩き出した。
しかし何故か霊夢の動き、いや目に映る全ての景色がやけに遅く見え、逆に思考の速度が加速する。

霊夢に任せていれば治る？

それならば、既に治っているはずだ。
唯一の肉親であり、弟だから自分だけで何とかしたいという霊夢の気持ちは分かった。
だけど……、

その考えは間違ってる。

「霊夢」

「……何よ、まだ何か言いがかりでもつけたいの？」
めんどくさそうに返してくる霊夢に顔を向ける。
「お前は一人で霊耶を救うのか？」
「そうよ。絶対に治してみせるわ」
真剣に答える霊夢からそれだけは譲れない、言わずとも本気でそ

う思っている事が手に取るように理解出来た。
だからこそ訊ねる。
「どうやって治すんだ？」
「……まだ分からないけど、必ず見つけるわよ」
案の定、返ってきたのは曖昧。
霊夢、お前は霊耶の姉として、家族として助けようとし過ぎるあまり、大事な事を見落としている。
本人のいる前で言うのは酷だが、

「このまま一人で霊耶を治す方法を探すんなら、お前は確実に霊耶を死なせる事になるな」

霊耶を何とかしてやりたいのはお前だけじゃないんだぜ？
「……魔理沙、アンタでも言っていい事と悪い事があるわよ」
震えた声で話す霊夢。
恐らく、いや間違いなく怒りを抑えているんだろう。
微かに殺気を感じる。
だが私は言う。
「聞こえなかったか？　ならもう一回言ってやるぜ。もしこのまま一人で霊耶を治す方法を探すなら、お前は確実に霊耶を死なせる事になる」
例えここで霊夢と喧嘩になろうとも、それで霊耶を救える確率が上がるのなら。
「魔理沙ァアア！」
「ちっ、やっぱこうなるか……」
案の定霊夢が突進しながら、弾幕を放ってくる。
霊耶に当たらないよう箒に跨がり、外に飛び出して上空に浮上する。追いかけるように霊夢も上空に上がり、間髪入れずに大量の弾幕を展開した。
それらを全て放ちながら霊夢が声を上げる。

「私のどこがダメだって言うのよッ！　助ける方法が分からないなら調べるしかないじゃない！」
悲鳴の様に叫びながら放つ霊夢の弾幕をかわしつつ、隙を見てこちらも弾幕を張りながら言葉を返す。
「私だってそれほど助けたいっていうお前の気持ちは分かるぜ！けどやり方が効率悪いんだよ！」
怒鳴る私に霊夢の殺気が増す。
「無いものを探してるんだから正しいか間違ってるかなんて分かんないし効率なんてもっての他じゃない！」
「何でお前は簡単な事に気付かないんだよッ！」
霊夢は混乱しているらしく、首を大きく左右に振り私を睨み付けてくる。

「とにかく、私は一人で探すわ！　霊符“夢想封印”！」
霊夢が一枚の札をかざした瞬間、霊夢最強の技がこちらへと放たれる。
……何で、
「何で気付かないんだよバカ野郎ォオオッ！」
恋符“マスタースパーク”！

霊夢の陰陽玉と私のレーザー。二人の間で互いのスペルがぶつかり、爆煙を上げた。
「はあっ……はあっ……」
先ほどの必殺技で大幅に魔力が減り肩で息をしながら、煙の向こうにいるであろう人物を見据える。
程なくして煙が晴れ、こちらと同様に肩で息をする霊夢がいた。

互いに何も言わず、互いに睨み合う。
「はあっ……はあっ――ッ！」
息を吐き切った瞬間を見計らったように霊夢が弾幕を放ち、一瞬反応が遅れたが何とかそれを辛うじて避ける。
すぐに顔を向けると、支えを失ったように落下していく霊夢が目に入った。
「ちっ、間に合ってくれ……！」

地面と寸でのところで捕まえ、静かに地面へと寝かせて、私も霊夢の隣に座る。
「……魔理沙、アンタが私に気付かせたかった事って何？」
息を整えていると、不意にそんな事を聞かれた。
「一人で探すんじゃなかったのか？」
わざとらしく肩を竦めて霊夢に問い掛ける。
「……うっさいわね。霊耶を治せるならプライドだって捨ててやるわよ」
拗ねたように顔を逸らして呟く霊夢に小さく笑い、別段からかうつもりもなかったためすぐに言葉を続ける。
「そうかい。だったら霊夢、私が言いたいのは『もっと人を頼れ』って事だ」
きょとんと目を丸くしてこちらに顔を戻す。
「人を頼る？」
言葉を、首を傾げて反芻してくる霊夢に頷く。
「ああ。今の霊夢は、霊耶を助けようとするあまり色々と視野が狭くなりすぎてるんだ。それだと一点からしか物事を考えられなくなって救えるものも救えない」
霊耶が死んでから案外近くに答えがあった、なんて灯台もと暗しは嫌だからな。

「……だから、人に頼れっていうの？」
横になりながら訊いてくる霊夢。
そこで気付いた。そういや私、霊夢に勝ったんだな。本題がこれじゃなきゃ、喜べたんだけどなぁ。
「ああ、人の繋がりはバカにできないぜ！」
私の言葉を呆気に取られた顔で聞いていた霊夢だが、次には笑みを浮かべ、
「まさかアンタの口からそれが聞けるとはね」
「失敬だなぁ」
そう言いながらも、二人で笑い合った。
少しして西の山に沈んでいく夕陽を眺めていると、不意に霊夢がクスリと微笑んだ。
「……想像してたのとはちょっと違かったけど、これはこれで良い事だっのかもね」
何やら小さな声で呟いており内容が気になるがが、純粋に綺麗な笑みを浮かべる霊夢に訊くのは　野暮だろうと、境内の方から徐々に大きくなってくる、今私達の疲れの理由である少年の声を背景に、霊夢に釣られ笑みを浮かべて夕陽に視線を戻した。

後日、空、紅霧にて（前書き）

後日、空、紅霧にて。

後日、空、紅霧にて

霊夢は今日、用事があるため早くに起床した。
先日の魔理沙との一件の後、魔理沙に霊耶が服用している薬の事を話すと、
「なら、そこに行けば何かしらの情報が手に入るんじゃないか？」
との言葉に、魔理沙と二人で薬を作っているところに行く予定なのだ。
ホントに灯台もと暗しだったぜ、と汗を拭った理由を霊夢は知らない。
「えっと、確か名前は」
薬のパッケージには『八意製薬』と書かれていた。
それを見ていて、今更ながら一つの疑問が思い浮かぶ。
「……場所、どこかしら？」
そうしている内に、外から声が聞こえてくる。
「おーい霊夢ぅ、起きてるかー！」
朝早いこの時間帯から活発な声に霊夢は苦笑とため息を吐く。
「朝から元気ねぇ」
みょんなところに感心しつつも、魔理沙に『八意製薬』の場所を知っているか訊ねようとすると、廊下に影が見えた。
急いでいるように見えるその影は霊夢の部屋の前で止まる。
「大変だッ、霊夢！」
ノックや挨拶などお構い無しに襖を開けて入ってきた魔理沙にため息を吐いて顔を向けると、
「……は？」
思わず呆けてしまう。それもそうだろう。
「……紅い、霧？」
辺り一面、真っ赤な霧に覆われていたのだから。

外に出て、辺りを見渡す。
「なぁ、これってやっぱ」
確認するように魔理沙が話しかけてくる。霊夢もそれに頷き、
「ええ、異変よ」
霊夢の言葉に魔理沙はため息を吐いた。
「あちゃー……。それで、どっちにするんだ、霊夢？　先に解決するのは異変か？　霊耶か？」
「霊耶……って言いたいところだけど、流石に職務怠慢はいただけないわね」
苦笑混じりに訊ねられ、霊夢もまたため息を吐いた。
「……いつも怠慢に暮らしてるけどな」
小さく呟いた魔理沙の言葉に眉を潜める。
「何か言った？」
訝しげに訊ね返す霊夢に魔理沙は首を振った。
「いやいや、何も言ってないぜ」
伸びをして魔理沙は軽く首を回す。
「んじゃ、さっさと解決するか！」
そう言って霊夢顔だけを向けた。自信に満ちた満面の笑みを添えて。
「そうね。でも、その前に霊耶に一言言ってくるわ」
霊夢の言葉に魔理沙も頷く。
「そうだな」
二人は、まだ部屋の主は寝ていると思われる霊耶の部屋へと足を向けた。

「霊耶、起きてる？」
霊耶の部屋の前に着き、襖越しに霊夢が声をかける。
しかし、中から返事はない。
「寝てるみたいだな」
苦笑いする魔理沙に、霊夢はため息を吐く。
「……ったく、霊耶！　起きなさ――ッ！？」
「霊耶ッ！？」
ため息を吐きながら霊夢が開けた襖の向こうには、口から血を流して倒れている霊耶がいた。
「霊耶！　大丈夫ッ！？」
咄嗟の事に思わず一瞬ばかり硬直したものの二人は慌てて駆け寄り、霊夢は霊耶の胸に耳を当てる。
「……良かった、心臓は動いてる」
「霊夢、泣いてる場合じゃないぜ。霊耶がこんなに吐血したんだ、早く何とかしないとヤバイだろ」
魔理沙の言葉に霊夢は立ち上がる。
「泣いてないわよ。……魔理沙」
霊夢は両腕で抱えている霊耶を魔理沙に渡した。
「……霊夢？」
霊夢の行動が分からず、霊耶を見てから首を傾げて霊夢を見る。
霊夢は真剣な表情で魔理沙に話す。
「霊耶をお願い。『八意製薬』ってところに連れていって」
「連れてくったって……場所が分からないぜ」
思わずため息を吐く。連れていけと言われても情報が少なすぎる。
「そこは頑張りなさいよ」
見も蓋もない霊夢の言葉に思わず頬が引きつる。魔理沙の口から再びため息が出た。

「何て無茶振りだよ……」
頭を垂れ盛大にため息を吐く魔理沙だが、上げた顔は既に決意を秘めたように凛々しかった。
「じゃあ行ってくるぜ！」
廊下に出てまだ部屋の中にいる霊夢に声をかける。
「ええ、行ってらっしゃい」
霊耶を大事に抱えた魔理沙が飛び立ち、見送った霊夢はもう一度霊耶の部屋の中を見回す。
「……あら？」
先ほどは気付かなかったが机の上に、雪崩の様に崩れた本の下に埋もれる様に、一枚の紙が折り畳んで置いてあった。
その紙には『夜中、胸が苦しくなって起き、灯りを点けると辺りが赤い霧に包まれていて、それを吸ったらいきなり吐血をし――』という震えた字が書いてあり、霊耶が霊夢に教えようと書いていたが意識が持たなかったらしく、最後の字は紙の終わりに横一線の黒が引かれていた。
それを見ながら霊夢は肩を震わせる。
理由は二つ。
一つは、苦しいはずなのに気力を振り絞ってまで、自分に教えてくれようとした霊耶に対して。
もう一つは、
「……この異変の犯人、霧だけでなく存在も消すわ」
霊夢の周りが蜃気楼のように揺めき、彼女の、この異変の犯人に対する殺意が容易に見て取れる。
「さて、どこにいるのかしらね……この異変を起こした自殺志願者は」
聖母の如き笑みを浮かべ阿修羅と化した巫女が今、大空へと飛び立った。

「あの屋敷ね……」
途中、湖で出会った妖精を瞬殺し、倒れた相手に跨がって胸ぐらを掴み寄せ、赤い霧を出している犯人の場所を訊くと、泣きべそをかきながら教えられた館が、朧気ながらに見えてきた。
「まず、すぐに霧を消してもらって……その後どうしてあげようかしら」
異変解決後の犯人の消し方を考えながら飛んでいると、不意に何者かが立ちはだかった。
「これ以上は行かせません！」
少しでも時間を無駄にしたくない霊夢はため息を吐いた。
「チッ、邪魔するなら異変解決後にしなさいよ」
そう言って機嫌悪そうに相手を睨み付ける。
「それじゃ意味がないじゃないですか！」
赤い髪で緑色のチャイナファッションをしている少女は構えをとり、霊夢はこれから始まる弾幕ごっこにため息を吐きながらも札を構える。
次の瞬間、相手から虹色の美しい弾幕が放たれた。
チャイナ少女の弾幕を避けながらこちらも弾幕を張りつつ、あの館にどう侵入するかを考える。
魔理沙と闘う時はあまり考え事をしないようにしている霊夢だが、今は思考する。しかも彼女を倒した後の事を。詰まるところ霊夢にとって、単にチャイナ少女が弱かったという事だ。
「魔理沙だったら箒でドアをぶち破りそうだけど……普通に入った

方が楽ね」
侵入方法を決め、邪魔以外の何者でもないチャイナ少女を墜とそうと一枚の札を出す。
「霊符“夢想封印”」
霊夢が誇る強力なスペルカードを彼女は最初こそは避けていたが、無駄がなく洗練された弾幕の動きに誘導され、案の定チャイナ少女は被弾した。
被弾した箇所を手で押さえて庇いつつ、霊夢に顔を向ける。
「くっ、背水の陣だ！」
そう言って館の方へと逃げていった。
「一人なのに陣って言うのかしら……？」
どうでもいいツッコミを入れ再び飛び始め、やがて館の正面まで辿り着く。
しかし、門の前に先ほどのチャイナ少女がいたため、遥か上空を通過し、無事に館への侵入を果たした。
室内へと入り、自らの勘を頼りに怪しいと思われる道を進む。
「……ここが一番怪しいわね」
途中でメイド服を着た妖精達を全滅させ、いかにもな扉の前に立つ。
「霊耶のためにも、さっさと片付けないとね」
霊耶の容態はどうだろうか、そんな事を考えて一度目を閉じる。
やがて目を開けてゆっくりと扉を開いた。
その中にいたのは、
「……魔理沙？」
床に、ロープでぐるぐる巻きにされた魔理沙と、
「ッ霊耶！？」

水色の髪の、蝙蝠のような漆黒の翼を背中に生やした少女の前に倒れている霊耶だった。

「ちょっとアンタ！　魔理沙と霊耶に何したのよ！」
霊夢は怒りからか、声を張り上げる。
それを見た水色の髪の少女は口の端をつり上げ、犬歯に伸びる二本の牙を見せた。
「――ッ」
それが何を意味するのか瞬間的に理解できた霊夢は恐る恐る、確かめるように声をかける。
「アンタ、まさか……」
若干震えた声色に少女は楽しそうな笑みを浮かべた。
「ふふっ、どうかしらね？」
水色の髪の少女は、そんな霊夢を嘲笑うかのように微笑み、言葉を濁した。
苦虫を噛んだ様な表情で睨み付ける霊夢に、少女は笑みを微笑みに変えて佇まいを整える。
「さて、ここまで来たからには、名乗っておこうかしら。私はレミリア・スカーレット。偉大なる吸血鬼の末裔よ。そしてここ、紅魔館の主でもあるわ」
自己紹介をしたレミリアは「それに……」と言って、一層の笑みを深める。
「幻想郷全体を覆っている紅い霧……異変の犯人よ」
愉しそうに話すレミリアに、霊夢は奥歯を鳴らす。
「なら、さっさと霧を消して。邪魔で仕方ないわ」
何とか自分を抑え、話をする霊夢。両手を、腕が震える程にきつく握る。そうでもしなければ今にでも目の前の元凶に飛び掛かりそうだった。

しかし、相手はそれを望まなかった。
霊夢の反応をレミリアはクツクツと軽く笑う。
「邪魔で仕方ない？　違うわよね、彼の命が危ないからでしょう？
大事な大事な弟の命が」
子供をあやす様な、わざとらしく挑発してくる様な声色と言葉に、
霊夢は目を見開き我慢は限界を迎えた。
至極愉しそうに笑うレミリアに、まさに弾幕と言える量の弾幕を
展開するが、
「あらあら、いいのかしら？　大事な弟にも当たっちゃうわよ？」
いつの間にか霊耶を抱えていたレミリアによって、放たれる事は
なかった。
「霊耶を放しなさいよ！」
弾幕を展開したまま怒鳴る霊夢。
それを見て、再び笑みを増すレミリア。
「あら、貴女の弟……割りと綺麗な顔ね」
抱えたまま、顔を寄せて霊耶の輪郭を指でなぞる。
「あぁっ、妖怪が霊耶に触んないでよ！　汚れるじゃない！」
「心外ね。ほら、こんな風に髪を撫でても問題ないわよ？」
ムッとした様に目を細ませるが、すぐに笑みに戻して霊耶の髪を
優しく撫でた。髪を撫でて次には髪に指を絡め、やがて霊耶を胸に
抱き寄せる。
レミリアの行動がエスカレートするにつれて、アワアワと声にな
らない口を動かす霊夢の顔が青白く歪んでいく。
「やめてぇえええっ、霊耶が穢されるぅぅッ！」
霊夢の悲痛な叫びは、紅魔館全体に轟いた。

「……遊びが過ぎたみたいね」

不意に真剣な表情で話し始めるレミリア。
「そう思うんなら、さっさと霧を消しなさいよ。それよりも早く、

霊耶を返してッ！」
後者を、ありえないほど強調する霊夢にレミリアは、何か思い付いたのか頷いた。
「分かったわ、返してあげる」
レミリアの言葉に一瞬満面の笑みを浮かべるが、すぐに慌てて無表情に戻して言葉を返す。
「さっさと返しなさ――」
「でも条件があるわ」
「……何よ」
言葉を遮られ、それ以上に嫌な予感しかしない霊夢はめんどくさそうに呟く。
「もうすぐあの扉から入ってくる人物を倒せたら、返してあげるわ」
簡単な条件でしょ、と笑みを浮かべる。
「イヤよ、めんどくさい」
しかし本気でめんどくさそうに返す霊夢に、レミリアは眉を潜めた。
「……そういえば、人間の血って美味しいのよね」
霊耶に視線を落としながら不意にレミリアが呟く。
「……何が言いたいのよ」
ピクリと眉を動かして霊夢は返した。
「ここに美味しそうな血が」
見せる様に犬歯の牙を出してレミリアは霊耶の首を見つめた。
そして一瞬、霊夢へと視線を移す。

「……分かったわよ！　やればいいんでしょっ、やれば！」
顔を反らして叫ぶ霊夢にレミリアは思わず笑ってしまった。
「あらいいの？　悪いわね」
礼を述べるレミリアを霊夢は半目で睨んだ。
「全然心がこもってないのよ……この婆ガキめ」
本当に小さく呟いた霊夢だが、レミリアからピキッと音が聴こえ

顔を向ける。
「さっ、この子の血を飲んで私の僕にしちゃいましょうかしらね」
「あぁっ、私が悪かったから、私が悪かったのでそれだけはお許しくださいレミリア様ッ！」
土下座に近いまでの謝罪を行う事で何とか許してもらい、霊夢は立ち上がりながら服についた埃を払う。
「ったく……」
そう言って改めて霊耶を助けるためにやる金出し扉を睨み付けていると次の瞬間、扉が爆音をたてて木っ端微塵に吹き飛んだ。
「……あれ？　お客さん？」
粉塵の中から出てきたのはレミリアの様な白いナイトキャップをかぶった金髪のショートボブの小さな少女。
人懐っこそうに笑みを浮かべ近寄ってくる少女に、霊夢は札を構える。
少女の背中には人間にはない、しかみレミリアとは違う木の枝に色とりどりの宝石をつけたのような翼が生えていた。
「……アンタ、人間じゃないわね」
睨み付けながら話す霊夢に少女はきょとんと首を傾げた。
「私？　私はフランドール・スカーレット。あそこにいるレミリアお姉様の妹よ」
そう言ったフランドールの視線が、あるところで止まる。
霊夢に向けて指をさした。
「それ、スペルカードよね？　私と遊んでくれるの！？」
霊夢の返事も聞かずに、先程霊夢が張った弾幕と何ら謙遜のない量の弾幕を放ってきた。
「アハハハハハハッ、簡単には壊れないでね？」
狂った様に純粋な笑いを浮かべて弾幕の量が増していく。
「チッ、何て量の弾幕よ……」
フランドールの、見た目の割りに量だけでなく動きや配置が洗練されている弾幕に舌打ちをし、後方へと飛んで距離を開く。

札を構え、向かってくるフランドールにこちらも飛び掛かる。
「不意打ち気味で焦ったけど、もう負けないわよ！」
そう言って霊夢も大量の弾幕を展開した。

「ふふっ、全ては運命のままに」
眼下で行われている壮絶な弾幕ごっこを見ながら微笑むレミリア。
だが不意に腕に振動が走り、視線を向けると――、
「……あ」
すぐに霊夢へと声をかけた。
「貴女！　間違って弟を落としちゃったわ、ごめんなさいね！」
「何やってんのバカァアアアアッ！」
叫び声を上げながらもフランドールの弾幕をかわして、落ちてくる霊耶を助けようと奔走する。
「後ちょっと……」
目と鼻の先まで来た霊耶に手を伸ばした瞬間。
「きゃっ」
目の前に物凄い風圧が発生し、霊耶を掴む事は叶わなかった。すぐにフランドールの声が聞こえてくる。
「もー、遊んでる途中で逃げようとしないでよ！　　これがあるから悪いのね？」
そう言って、脇に抱えていた霊耶に一枚のカードを宣言した。
「こんなの、すぐに消してやるわ。禁忌“レーヴァテイン”」
炎を纏う大剣が出現し、フランドールはそれを持った腕を振り下ろした。
「霊耶は殺させない！」
しかしそれは直前で割り入ったに霊夢よって止められた。
霊夢の行動にフランドールは怒った様に頬を膨らませる。
「止めないでよ。これは邪魔だから壊すの」

そう言ったフランドールの言葉に霊夢の眼光が鋭くなる。
「霊耶は物じゃない。そんな言い方しないで！」
激昂し睨み付ける霊夢を、きょとんとした顔で見ているフランドール。
「じゃあ何て言えばいいの？　だって、人間ってすぐに壊れちゃうじゃない」
「……アンタ、やっぱりこのままにはしておけないわね」
奪い返した霊耶を部屋の端に寝かせ、奥歯を噛み締めフランドールに向かおうと一歩足を踏み出す。
だがそれは、

「……姉、さん」

反対の足が、弱々しいながらも霊耶に捕まっていた。
「霊耶っ、大丈夫！？」
霊夢はすぐに抱え起こし、まだ辛いのか意識が朧気な霊耶の背中を優しく擦った。
霊耶は、弱々しくはあるものの微笑んで「ありがとう、姉さん……」と言い、その体勢のまま言葉を続ける。
「姉、さん……実は、少し前から意識はあったんだ……」
「そうなの？」
弟が無事な事に霊夢は安堵のため息を吐く。
コホッコホッ、と咳をしながらも霊耶は話を続けた。
「それで、気付いたんだけど……あの子、僕と似てる気がするんだ……」
「は？」
思わずきょとんとする霊夢。
それもそうだ。
「何で、寝ぼすけだけど気が利くし優しい霊耶と、明らかに狂気が服を着ているようなあいつのどこが似てるって言うのよ」

霊夢の言葉に、レミリアは小さく顔を歪ませていた。
「違うよ、僕が言いたいのはそういった事じゃないよ」
落ち着いてきたのか顔を動かし、いきなり動き出した霊耶を興味深そうに眺めているフランドールへと向けた。そんな、子供みたいな彼女を見て霊耶は小さく微笑む。
「僕が言いたいのは」
顔をフランドールからレミリアへと向けた。
「あの子も『篭の中の鳥』だって事だよ」

「篭の中の鳥？」
聞き返してくる霊夢に頷く。
「うん。僕はあまり外には出れないでしょ？」
「え、ええ」
正確には出さないだけどね、と内心自分に毒づく霊夢。
「あの子も、僕と同じ雰囲気を持ってる気がする」
そう言って再びフランドールを見る。
「雰囲気？　私には純粋無垢な狂気しか見えないけど――まさか」
何かに気付いたのか、霊夢は呆れたようにフランドールを見ていた顔を霊耶へと向けた。
霊夢の反応に霊耶は頷く。
「そう。あの子はずっと独りだったんだ。だからこそ悪を悪と感じないし、笑いながら人だって殺せる。それは全て、純粋に何も知らないから、教えられなかったからだと思うんだ」
悲しそうな顔で話す霊耶を、霊夢はただ名前を呟くしかできなかった。

「ねぇ、早く弾幕ごっこしようよ！」
不意に痺れを切らしたフランドールの声が聞こえてくる。
「姉さん」
「なに？」
次に言うであろう言葉を理解しながらも疑問で返す霊夢。
それを見て「何でもお見通しみたいだね」と小さく笑う霊耶。
「何年アンタの姉をやってると思ってんのよ」
ため息を吐いた霊夢に「そうだね」と頷き言葉を紡ぐ。

「僕は、あの子を救いたい」

立ち上がりフランドールへと体を向けた霊耶の背中を見ながら、霊夢は小さくため息を吐く。
優しい弟の事だ、先ほどの悲しそうな顔をした時からこうなるのは薄々気付いていた。
いつの間にか自分の背丈を越えた弟の、華奢だが男らしく見える背中にそっと手を当てる。
「だからって、無茶はしないでね……？」
自分でも驚くほどにか細いその声に、自分の中でいかに霊耶が大切な存在なのか改めて理解できた。
もし弾幕戦となっても、かなり厳しいが護れない事はない。
しかし、その他の要素で倒れたならば自分にはどうする事もできない。
「姉さん……」
霊耶に声をかけられ顔を上げた。
そこで気付く。
知らず知らずの内に、霊耶の服を掴んでいた。

「大丈夫だよ、姉さん」

霊耶の言葉と共に訪れた、頭の温もり。霊耶が頭を撫でていた。
弟のクセに、と思いつつも甘んじてそれを受ける。
今まではしてあげてた方だが、たまにはされる方になってもいいかもしれない。
しかし同時に、霊耶がまた一つ自分から離れたと実感し、嬉しさもあるが何とも言えない虚無感を感じた。
不意に頭が軽くなり、顔を向ければ霊耶が笑っていた。
「じゃあ、行ってくるね」
霊耶はフランドールへと歩いていった。

「フランドール、でいいのかな？」
話しかけるとフランドールは可愛らしく目をキラキラと輝かせる。
「あなたが代わりに遊んでくれるの？」
今にも飛びかかってきそうなフランドールに苦笑しつつも、言葉を返す。
「うん。だけどその前に、お話しないかな？」
「イヤよ、お話なんて暇だもん」
それより早く遊びましょう、と目をキラキラさせるフランドールに霊耶は、苦笑だった笑みを微笑みに変えた。
「そうかい？　僕はただ、君とお友達になりたいと思って、君をもっと知りたかったんだけどな」
霊耶の言葉に、フランドールは驚いた顔で霊耶を凝視する。
「えっ、お友達……？」
「うん。ダメかな？」
笑みを浮かべて首を傾げた霊耶だったが、何かを感じ後ろに下がる。肩に手を置いた霊夢によって下げられた。
その内、フランドールが喋り出す。

「お友達……前はいたけど、皆いつの間にか私の前からいなくなった。……だから、もう私の前からいなくなる友達なんてイラナイッ！」
大量の弾幕を放つフランドール。
「くっ、夢符“封魔陣”！」
霊夢はすぐにスペルカードを宣言し、自分と霊耶の前に青白い壁を張った。
「フランドール！　話を聞いて！」
危うく殺されかけたのに、悲しそうな顔でフランドールに懸命に話しかけている霊耶の声を聞き、霊夢は小さく奥歯を鳴らした。「アンタ！　霊耶が友達になりたいって言ってんのよ！？　つべこべ言わずになりなさいよ！」
スペルカードの発動時間が切れ、すかさず弾幕にて応戦する。
「イヤッ！　もう悲しみたくないの！」
全てを拒絶するようにフランドールはスペルカードを宣言した。
「QED“495年の波紋”！」
同時に、この部屋全部を覆っているかのような、驚異的な量の弾幕が展開された。
弾幕は華麗に、しかし残酷に縦横無尽へと動き、霊耶を護らなければならない霊夢は、必然的に壁へと追いやられる。
「くっ……」
最初は弾幕で防いでいたが、あまりの量と驚異的な発動時間により徐々に均衡が破れ、今は結界を張り防御な徹していた。しかしそれも長く持たず、辛いのか霊夢の額には玉のような大粒の汗が滲んでいる。
次第に結界にヒビが入り始め、ここまでか、と諦めた霊夢。しかし霊耶だけは護ろうと、両手を広げて霊耶への被弾を防ぐ様に立ち上がる。
同時に硝子が割れたような音を出して結界が砕け散った。
それに伴い、壁の様な密度の弾幕が一気に襲い掛かる。

せめて倒れない様にと、痛みに堪えるために目を瞑った。
しかしそれは、
「恋符“マスタースパーク”！」
迫り来る弾幕を巻き込み、目の前を横切った虹色のレーザーによってかき消された。
目を開けて呆然とする霊夢に、聞き馴染んだ声が聞こえた。
「弾幕はパワーだぜ！」

「魔理沙……」
「よう、危なかったみたいだな」
呆然と見る霊夢に、ニヒルな笑みを浮かべる魔理沙。
「まぁ、でもこの私、霧雨魔理沙様が来たからにはもう安心だぜ」
箒に跨がりフランドールへ突貫しようとする魔理沙を霊夢は止める。
「待ちなさい。霊耶が、自分と似てるあの子と友達になりたいらしいのよ」
「似てる？　私にはあいつが、狂気が服を着ているようにしか見えないんだが」
「ある意味満点な解答ね……」
「は？」
こっちの話よ、と霊夢は話を続ける。
「それで、霊耶と話をさせるためにあいつの攻撃を止めさせたいんだけど」
「それは、大した注文だな」
「ええ」
二人は狂乱したように弾幕を撃ちまくっているフランドールを見た。

「「はぁ……」」
そしてため息。
「でも、やるしかないか！」
魔理沙は霊夢に笑みを浮かべる。
「そうね、他でもない霊耶の頼みだもの」
互いに頷き、どちらともなくカードを取り出した。
「それじゃ、私が道を開くから後は頼んだぜ」
魔理沙は小さな八卦炉を展開し、力を込める。次第に風の様なものが体を包み、魔力の奔流が徐々に彼女の手にある八卦炉へと集まっていく。
やがて魔理沙を包んでいた風が消えて目を開くと同時に両手の平を前に突き出した。
「行くぜ！　魔砲“ファイナルスパーク”！」
その瞬間、轟音が部屋の全てを支配した。　魔理沙の放った、マスタースパークとは比にならないほど極大なレーザーは、立ちはだかる全ての弾幕を飲み込みながらフランドールへと直進していく。
フランドールはそれをかわすが、そこには明らかに大きな道が魔理沙からフランドールへと繋がっていた。
「行くわよ、霊耶」
驚きのあまり固まっている霊耶を優しく抱き抱え安全に、かつ速くフランドールの下へ魔理沙の作り出した道を通る。
「フランドール！」
近付いてすぐに、霊耶が落ち着かせようとフランドールを抱きしめる。
「イヤッ！　離れてッ！」
「ガッ……！」
「霊耶！」
しかし吸血鬼の凄まじい力によって振り払われ、霊耶は地面に叩きつけられた。
打ち所が悪かったのか、口から血を吐く霊耶を見て霊夢は顔を青

くしながら駆け寄る。呼吸が困難なのかくぐもった咳をする霊耶の背中を擦りながら、霊夢はフランドールを睨み付けた。
「アンタの周りから友達がいなくなった理由が良く分かったわ。アンタは生き物の脆さをちっとも分かってないからよ！」
霊夢の言葉にフランドールは目を見開きよろめいた。
「……あ、れ？　私が悪いの？　　私が悪い子だから皆いなくなったの……？　違う……違うッ！　私は何も悪くない！　悪くないもんッ！　全部、皆が悪いのよッ！」
フランドールの狂気が一気に増大した。　縦横無尽に弾幕を乱発する。
「これはマズイわね」
瞳から光が消えたフランドールを見ていた霊夢の隣にレミリアが降りてきた。
「だから何よ」
「このままだと紅魔館も壊されかねないもの。フランを止めるわ」
「出来るの？」
訝しげに訊いてくる霊夢に、レミリアは口をつり上げる。
「もちろんよ、咲夜」
「はい」
レミリアが「咲夜」と呼んで一瞬もしない内に、彼女の後ろにメイド服を着た銀髪の女性が立っていた。
その光景を驚いたように見ている霊夢を無視し、レミリアは咲夜と呼ばれた女性に話しかける。
「パチェは？」
「既にお呼び致しました。間もなく到着されると思います」
レミリアの問いに咲夜は淡々と答え恭しく頭を下げる。
「流石ね。なら、フランの動きを止めるわ。……咲夜、やりなさい」
満足げにレミリアは頷き、視線のみを咲夜に向けた。
「畏まりました」
そう言って咲夜は一瞬にして消え、またしても一瞬にして現れる。

同時にフランドールが大量の血を流して倒れた。
身体中に死角なくナイフが刺さっており、それを見た霊夢は「うげ」と顔を逸らした。
霊夢の後ろでその光景を見ていた霊耶は、目を見開き固まっていた。
「フラン、ドール……？」
呟かれたその声に反応し霊夢が振り返ると、
「……霊耶、何で泣いてるの？」
涙を頬に伝わせる霊耶がいた。
霊耶は歪めた顔で霊夢を見る。
「だって、フランドールが……死」
「死んでないわ」
「えっ？」
言葉にするのを躊躇ったが、言おうとするとレミリアの否定の言葉によって遮られた。
「で、でも、あんなに血を流してるし……」
不安そうにレミリアに反論するが、レミリアの表情は変わらない。
「私達は吸血鬼よ？　あんな傷、すぐに治るわ」
不意にガチャッと言う音が聞こえ振り返れば、地面に着くほどの紫色の髪に、紫色のネグリジェのような服の、胸に大事そうに大きな本を抱えた少女が入ってきた。
「あら、パチェ。いいところに来たわ」
「ええ、咲夜から貴女の妹が暴れ出したって聞いた時は、まだ時期じゃないのに可笑しいと思ったけれど、ここに来て納得できたわ」
レミリアが親しそうに話すのをただ見ている博麗姉弟。
「なぁ、誰なんだ？　アイツは」
こそこそと魔理沙が話しかけてきた。
「私が知るわけないじゃない」
霊夢の言葉に霊耶も頷く。
「ちょっと、貴方達」

突然、紫色の少女に話しかけられた。
「今からあの子をおとなしくさせるから少し離れて」
三人は理解出来なかったが、指示にしたがって壁際に寄り事の顛末を見る事にする。
するといきなりフランドールに大量の雨が降りかかった。
「――ッァァァァァァァァァァッ！？」
声にならない叫びを上げるフランドール。
「いくら強いと言っても吸血鬼にだって弱点はあるの。ニンニクや十字架はデマカセだけど、浄められた水……聖水は私達にとっては太陽の光と並ぶ弱点なの」
いつの間にか隣に来ていたレミリアが説明してくれた。
「敵に弱点を教えていいのか？」
魔理沙の疑問に、レミリアはクスリと微笑む。
「そんな卑怯な手、貴女達は使わないでしょう？」
レミリアの視線に魔理沙は笑みを浮かべる。
「まぁな！　やっぱり弾幕は火力だぜ！」
魔理沙の言葉に霊夢は思わず額を押さえた。
「アンタのは次元が違うわよ……」
二人のやりとりが面白いのかレミリアは小さく笑い「それに、この話は有名だもの。今更話したところで大して変わらないわ」と付け足した。

「ちょっと貴方、一体何をする気？」
不意に響いた紫色の少女の声。
その声に反応し三人が振り向くと、
「フランドールは今まで孤独だったんです。だから、これ以上あの子を苦しめないで下さい……」
紫色の少女の前で土下座をする霊耶がいた。

「貴方、あの子は貴方にとって敵のはずよ？　何故そうまでして助けたいの？」
目を細めて霊耶に訊ねた。霊耶は頭を上げ真剣な顔で理由を話す。
「フランドールが、僕と同じで『篭の中の鳥』だからです。あの子は心にこそ大きな傷を負っていますが、それだけで飛ぶ事を禁止させる権利は誰にもない！　例え、それが姉であろうとも」
霊耶はレミリアを見つめ、レミリアは霊耶を睨む。
「篭の中の鳥、ね……」
紫色の少女は小さく呟いていた。
やがて小さく頷き、早口に言葉を紡ぐ。
「ちょっとパチェ、何で魔法を解くのよ」
レミリアはフランドールに降らせていた雨の魔法を解いた紫色の少女へと詰め寄った。
紫色の少女はレミリアに構わず霊耶へと話しかける。
「開けてみなさい……あの子の心に閉じられている自由への扉を」
「は、はい！」
呆然と見ていた霊耶だったが、紫色の少女の言葉に頷き力なく地面に伏せているフランドールへと歩いていった。

「どういう心算かしら？　パチェ」
霊耶の後ろ姿を見ながらレミリアが訊ねる。
紫色の少女――パチュリー・ノーレッジは小さく笑みを浮かべ、話す。
「特に理由はないわ。強いて言うなら……興味が沸いたってだけ」

「フランドール……」
力なく地面に倒れているフランドールへと駆け寄り、そっとフランドールの上半身を起こした。
「……ぁ……ぁぅっ……」
話す事もままならず、フランドールは何とか視線を向ける。
霊耶は何も言わず胸の前にフランドールの体を起き抱えた。徐々にではあるがナイフによる傷が癒えてきてるのを見て、霊耶は安堵の笑みを浮かべる。
不意にフランドールの手が霊耶の頬に触れた。
驚く霊耶をよそに掠れた様な声で話す。

「……なん、で……泣、いてる、の……？」
一瞬ばかり呆けるが、霊耶はすぐに笑みを浮かべた。
「……フランドールが無事で、嬉しいから泣いてるんだよ」
頬に置かれたフランドールの手を重ねる。
霊耶の言葉にフランドールは困ったように眉を寄せ、
「……ごめんなさい。こういう時、どんな顔をすればいーー」
「霊耶ッ！」
フランドールの言葉を遮り、霊耶が泣いていると聞き不安になった霊夢が駆け寄ってきた。
霊耶は、何も知らない純白なこの少女に、篭から大空へと飛び立つための一歩を歩ませようと微笑み、

「……笑えば、いいと思」

「大丈夫か！？」

霊夢を追ってきた魔理沙によって声を遮られた。
「霊耶っ、どこか痛むの！？」
「もし痛かったらちゃんと言うんだぞ？」
外傷がないか身体を触る二人に苦笑しつつ、
「フランドール」
「……なに？」
フランドールに向けて最高の笑顔を浮かべた。
「僕と、お友達になってくれる？」
そう言って、手を差し出す。
フランドールは驚いた顔を浮かべて霊耶の手と顔を交互に見つめた。
「えっ、でも……私……」
しかし、肝心な一歩目を踏み出す勇気を持てないフランドール。
「フランドール」
そんな彼女を見て、霊耶は優しく話しかけた。
「もし、独りに堪えられなくなったり、辛くなったりしたら……遊びにおいで」
「遊びに、行く？」
首を傾げる彼女に頷く。
「そう。来て欲しいとばかりせがむのはただの我が儘だからね。自分からも遊びに行ってあげないと……君にはこんなに素敵な翼があるじゃないか」
繊細なものを扱うように、フランドールの翼を撫でた。
「ホントに、いいの……？」
翼を撫でられ気持ち良さそうに目を細めるが、すぐに不安そうに見上げてくるフランドール。
「何がだい？」
笑みを浮かべながら聞き返す。
次にフランドールが言うであろう言葉を霊耶は分かっていたが、敢えて口にせず彼女に言わせる。

変わるために、新たな一歩を踏み出すために、彼女が言わなければ意味がないから。
口を開いては閉じてと中々決心できなかったフランドールだが、ゆっくりと目を閉じて深呼吸をする。
数回した後、目を開けたフランドールには、まだ不安そうではあるが決意は固めたように凛々しかった。
今度は彼女から手を差し出し、
「私と、お友達になってくれる……？」
不安そうに見上げてくるフランドール。

「喜んで」
霊耶は最高の笑みを持って応えた。

差し出された手を握り返し、まだ自分が名乗っていない事に気付く。
「紹介がまだだったね、僕は博麗霊耶。よろしくね、フランドール」
フランドールは「はくれい、れいや……霊耶」と噛み締めるように名前を呟き、
「よろしくっ、霊耶！」
太陽のように輝く笑みで霊耶に抱きついた。
おっと、と転びそうになりながらも何とか堪えた霊耶は、こちらも友達第二号ができた事からか嬉しそうに笑いながらフランドールの頭を撫でた。

「もう遅いから、今日は泊まっていきなさい」
不意にレミリアが話しかけてくる。その声につられ、その場にい

た者は振り返った。
「もう、夜だ……」
窓を見た霊耶が呟いた。
「ホントね。どうする、霊耶？　泊まっていく？」
体調を心配してか、霊耶に話しかける霊夢。
霊耶は「うーん……」と考えつつ下を向くが、すぐに顔を上げた。
「泊まるよ」
「はぁ……、しょうがないわね……」
霊夢は、その言葉を聞き嬉しそうに笑顔を浮かべたフランドールの頭を撫でる霊耶に、笑みを溢しつつため息を吐いた。
「一緒に寝ようっ、霊耶！」
太陽のように無垢な笑顔で言ってくるフランドールに、霊耶も嬉しそうに頷く。
「それはダメよ」
しかし霊夢によって反対された。
「何でダメなの！？」
フランドールが当然のように抗議の声を上げる。
当たり前じゃない、とフランドールの言葉に霊夢はため息を吐いた。
「アンタ、霊耶と一緒に寝るって事は……抱きついて寝るんでしょ？」
何故か抱きついて寝ることを確定事項に訪ねる。
「うん！」
元気に頷くフランドールに、再びため息を吐いた。
「アンタ、自分の力がどれだけ強いか自覚してる？」
「私の力？」
きょとんと首を傾げるフランドールに、霊夢は思わず頭を抱えた。
「……とりあえず、これを握ってみなさい」
フランドールに、登場の時に粉砕したドアのノブを渡した。
「これ？　分かった」

バキン、と音をたて潰れた。
鉄製だった。「尚更アンタを霊耶と一緒に寝かせるわけにはいかなくなったわ……」
「ええっ、なんで！？」
「フラン、今回は諦めなさい」
このままでは埒があかないと思ったのか、レミリアもフランドールを宥めにかかる。
「うぅ、お姉様まで……」
流石にレミリアからも反対され、渋々了承したのかフランドールはふて腐れてしまった。

「博麗の巫女」
頬を膨らませて霊耶に抱きつくフランドールに苦笑してから振り返り、レミリアは改まった表情を浮かべた。
「私はそんな名前じゃないわ。博麗霊夢って名前があるの」
「そう。じゃあ霊夢」
「馴れ馴れしいわね……。それで？」
言葉の割りにどうでもいいのか、話を続けるよう促した。
「ええ。部屋なんだけど……一つでいいかしら？」
含みのある笑みを浮かべて霊夢を見る。
「何よその、本心を見抜いてるみたいな目、妙に苛つくんだけど……」
「ふふっ。一応、気は利かせたつもりだけど？」
微笑むレミリアにため息を吐く。
「……分かったわよ。だからそのいけ好かない笑みを今すぐやめなさい」
笑みを崩さず目だけを僅かに細めて霊夢を見た。
「素直にならないと、いつか離れて行くわよ？」

「余計なお世話よ」
レミリアはため息を吐き、
「まだ、当分先のようだけれどね」
二人の会話を頭に疑問符を浮かべて聞いているフランドールと霊耶を見て微笑んだ。
「お嬢様、御夜食の準備が出来ました」
いつの間にか消え、いつの間にか現れていた咲夜がレミリアの後ろから声をかけた。
レミリアは「そう」と頷き霊夢達へと顔を向ける。
「貴方達、私達はこれから食事だけれど、お腹の方は空いてるかしら？」
「私は空いたわね。霊耶は？」
「僕も、よく考えたら今日、何も食べてないからペコペコだなぁ」
笑いながらお腹を擦る霊耶を見て、険しい顔でレミリアへと振り返る霊夢。
「早く案内しなさい」
「そんなに焦らなくたって料理は逃げないわよ」
小さく笑うレミリアに僅かに視線を強め言葉を返す。
「無理矢理でもすぐに案内してもらうわよ？」
スペルカードを取り出した霊夢。
「……分かったわよ。本当に彼が大切なのね」
「ご託はいいからさっさと案内しなさい」
はいはい、とため息を吐いてレミリアは自らの従者に二人の案内を任せ、自分は先に部屋を後にした。
咲夜に「それでは着いてきて下さい」と案内される霊夢を肩越しに見ながら、レミリアは小さく呟く。
「ホント、いい姉だこと……」
自嘲気味に放たれた言葉は、誰に聞かれるわけでもなく夜の闇へ

と溶けていった。

「わぁ、見た事ない料理ばかりだ」
テーブルに並べられた料理を見た霊耶の言葉に、フランは驚きの声を上げる。
「ええ！？　霊耶、洋食知らないの！？」
「洋食？　フラン、これは洋食って言うの？」
霊耶はここへと案内される途中、フランドールから「フランって呼んで！」と頼まれたため、彼女をフランと呼ぶ事にした。
霊耶に訊かれたフランは「うん！」と元気に頷き、嬉しそうに次々と料理の名前を教えていく。
「フランったら、友達ができたのがよっぽど嬉しいのね」
レミリアはその光景をみながら優しく微笑んでいた。
「それよりも貴女、今までどんな料理を作っていたのよ。洋食を知らないなんてあんまり過ぎないかしら」
咲夜に声をかけられ、自分が館長を務める、紅魔館の地下にある図書館から先ほど来たパチュリーが霊耶の言葉を聞いて、椅子に座りながら霊夢に非難の声をかける。
「う、うるさいわね！　　洋食の作り方なんて知らないんだからしょうがないじゃない」
案の定開き直った霊夢に「彼も、こんな姉で大変ね」とため息を吐き、興味をなくしたのか本を開きそこに視線を落とした。
「全く、ここにはロクなやつがいないわね……」
暫く睨んでいたが、パチュリーから視線を外しため息を吐いた霊夢だった。

食事を終え、霊耶は今お風呂へと向かっていた。
「あっ、次の角は右よ」
霊夢を伴って。
「姉さん、何度も言ってるけど今日は気分がいいんだ。だから大丈夫だよ」
「ダメよ、そう言ってもし倒れたら嫌だもの」
そう言って再び歩き出す霊夢。
霊耶は小さい頃お風呂に入っていて、全く上がってこない事を不審に思い風呂場を見に来た霊夢によって、気を失い倒れているのを発見された事があった。
それ以来、お風呂に入る時は必ず霊夢が同伴するようになり、今回もその例から外れる事はなかった。
「ただでさえアンタは今朝、血を吐いて倒れていたのよ？　もし医者から大丈夫と言われても絶対に一人でお風呂には入れないわよ」
憮然な表情で言う霊夢に苦笑し、諦めて前へと向き直った。
すると霊夢が思い出したように話し出す。
「そういえばアンタがさっき言ってた「調子がいい」ってのは、レミリアが能力でアンタの運命を変えたからしいわよ」
「運命を変えた？」
霊夢の言葉に思わず首を傾げる。
そんな霊耶に霊夢は頷いた。
「ええ。霊耶の能力が強すぎて運命を断ち切るまではできなかったらしいけど、紅魔館にいる間は体調を崩す心配はないって言ってたわ」
霊夢の話を感心した表情で聞いていた霊耶だが、不意に言葉を返した。
「だったら、一緒にお風呂に入らなくてもいいじゃないか」

結局霊夢の屁理屈に屈し一緒に入る事となった霊耶は現在、お風呂から上がりレミリアに用意された部屋でベッドに座り、霊夢に髪を乾かしてもらっていた。
「相変わらず綺麗な髪ね……」
乾かしながら霊耶の髪をそっと撫でる霊夢。
タオルで暴れる自分の前髪を見つめながら霊耶は小さく呟いた。
「そうかなぁ、姉さんの方が綺麗だよ」
「……そう、ありがと。はいっ、終わったわよ！」
もう夜中だから早く寝ましょ、と些か早口で言う霊夢に頷いて布団に入り、隣に霊夢が入ってくる。
「姉さんと一緒に寝るって久し振りだね」
声に反応し霊夢が振り向けば、嬉しそうに微笑んでいる霊耶がいた。
そんな弟にため息を吐きつつも微笑み、優しく頭を撫でる。
「そうね」
くすぐったそうに目を瞑る弟を護りたいと、改めて決意をする霊夢だった。

静かに寝息を立てる霊耶の頭を軽く撫で、ベッドから降りてドアに向かって話しかける。
「隠れてないでさっさと出てきなさいよ、レミリア」
霊夢の言葉に少ししてドアが開いた。
「あら、流石は歴代最強と謳われる博麗の巫女ね」

「心無い称賛はいいわ。こんな時間に何の用？　わざわざ霊耶が寝たのを見計らってくるなんて」
楽しそうに微笑んでいたレミリアだが不意にその顔を真剣に戻し、穏やかな表情で眠る霊耶を一瞥してから言葉を紡ぐ。
それは霊夢を驚愕へと導くには容易すぎる言葉だった。
「詳しくは解らないけどこのままだと今日……彼の運命は終わるわ」

続！　後日、空、紅霧にて（前書き）

続！　後日、空、紅霧にて。

続！　後日、空、紅霧にて

「……んっ」
目を開けると、知らない天井だった。
そこでようやく昨日、初めてのお泊まりをしたのだと思い出した。
「おはよう、霊耶」
隣から聞こえてきた姉の声。
「おはよう、姉さん」
言葉を返しながらまだ眠い目を擦って体を起こす。窓を見れば、太陽がまだ木々の間から抜け出していなかった。
だがこんな早く起きた事は今までにないし、起きた時に必ずあった倦怠感がないのも初めてだ。
環境が違うからだろうか。
「霊耶、まだ朝だけど寝ていなくて大丈夫？　眠いなら寝てていいのよ？」
早起きした事に驚いているのか、いつもとは反対の声をかけてくる。
「大丈夫だよ、姉さん。こんなに目覚めがいいのは初めてだよ」
「そう……」
心配そうに見てくる姉に、何故か違和感を感じた。
「どうしたの、姉さん？」
「何がよ」
訊ねてみたがいつも通りの返事をされ「それじゃ、ご飯もできているみたいだし食べに行きましょ」とベッドから降りた。
姉に続いてベッドを降り、部屋を後にした。

……やはり、おかしい。
再び感じた違和感への感想。
姉と食堂を目指し廊下を歩いているが何故だろう、心なしか距離が近い気がする。
その事を訊いてみるが、
「気のせいよ」
またしても、はぐらかされてしまった。
食堂に着き、咲夜さんに運んできてもらった料理を食べ始めても、姉に対する違和感が消える事はなかった。
「霊耶、私が食べさせてあげるわ。はい、あーん」
……うん、もう確定だね。
「姉さん、別に大丈夫だよ。僕の分もナイフ？　とフォー、ク？があるんだから」
一通りの使い方は、さっき咲夜さんに教えられたから一人で食べる事くらいならできる。
「ダメよ。霊耶はまだ使い慣れてないから、怪我するかもしれないでしょ？　だから、私が食べさせてあげるのよ」
そう言って僕の手元にあったナイフとフォークを掴み腕を振ったと思えば、綺麗な音を立てて壁に刺さっていた。
「霊耶様、代わりのナイフとフォークをお持ちしました」
しかしいきなり隣に現れた咲夜さんが、代わりのナイフとフォークを先ほどと同じように手前に並べてくれた。
「ちょっと、霊耶はまだ使い慣れてないんだからそんな物騒な物を渡さないでよ」
怪我したらどうするのよ、と不機嫌そうに眉を寄せる姉に、咲夜さんは一度も変化を見せない無表情で対応する。

「霊耶様、何をなさっているのですか？」

「あ、あはは。咲夜さんみたいな無表情をちょっと……」

気付かれてしまった。

そうですか、と言って顔を姉へと向き直す。

「お言葉ですが霊夢様、霊耶様には私が責任を持って使い方を教えましたので、余程頭の弱い方でなければ怪我をする心配はないかと」

咲夜さんの言葉に、姉の眉が微かに動いた。

「ちょっとアンタ、今霊耶をバカにしたわね？」

「いえ、バカにはしておりませんが」

うん、僕も咲夜さんの意見に賛成だな。咲夜さんはただ例えを言っただけだと思うし。

しかし姉には伝わらなかったようで、

「いいや、確かにバカにしたわ。はぁ、やっぱロクなやつがいないわね、ここは。ま、あのお子様が主だから仕方ないわね」

あろう事か、無関係なレミリアさんを巻き込んだ。

当然、従者である咲夜さんが黙っているはずがなく、

「……いくらお客様でも、それは許容し難い言葉です」

「おぉ……」

今まで姉や魔理沙みたいな直情的な人しかいなかったから、自分を抑えている咲夜さんがとてつもなく素晴らしい人に見えた。

咲夜さんに尊敬の眼差しを送っていると、姉が口を開く。

「あら、気に触ったなら謝るわ。ここの住人は皆、気が短すぎだからどこで琴線に触れるか分からなかったわ」

……悪いけど、僕には姉さんが一番気が短いと思うよ。

「お客様とはいえ先ほどの発言、見過ごす訳にはいきません」

流石に堪えた咲夜さんが手にナイフを取り出して構える。

「……やっぱりここの住人は気が短いわね」
自分の事を棚に上げた発言をしつつ、姉も札を取り出して構える。
楽しいはずの朝食が、一瞬にして戦場と化してしまった。
「さぁ、霊耶はアンタのご主人様なんかよりよっぽどできた人間よ！　さっさと謝りなさい！」
「いいえ！　誇り高き至高の吸血鬼であるお嬢様の方が素晴らしいお方よ！　訂正しなさい！」
互いに距離を詰め、弾幕を放つ。案の定テーブルが粉々となり、せっかくの料理が全部ダメになってしまった。
そして咲夜さん、口調が変わってますよ。

それにしても弾幕は何回見ても綺麗だと思う。
けれど、所詮は争い。
姉さんにも咲夜さんにも闘っては欲しくない。
熾烈な弾幕ごっこを繰り広げる二人に向かって体を動かす。
歩き出したが『運命を操る程度の能力』を持つレミリアさんが、紅魔館にいる間は僕の体調が崩れないようにしてくれたなら走っても大丈夫だろう。
「幻世“ザ・ワールド”！」
「霊符“夢想封印”！」
二つの最強が交わる刹那、弾幕によって声をかき消されながらも間に割って入った。

霊耶の存在に気付いた二人はすぐにスペルを解除しようとしたが間に合わず――、
霊耶は轟音と共に粉塵に包まれた。

霊夢は事態を信じられないような顔で粉塵を見つめる。
ぱらぱらと木材が床に落ちる音と共に次第に煙が晴れ、
半身の至るところに大量のナイフが刺さり、もう半身は腕や足があらぬ方向へと曲がり着ていた甚平が無惨にも抉られ水溜まりと言って過言のない量の血を流しながら倒れる霊耶がいた。
暫く唖然とその光景を見ていた霊夢だが、絞り出すように声を出す。
「……れい、や……？」
それにより徐々に現実を理解、受け入れ始め、ようやく思考が追い付いたのか霊耶へと覚束ない足取りで歩いていく。
「……霊耶？　　ねぇ……霊耶ってば、起きなさいよ。……ねぇ、ねぇ」
肩を掴み、揺する力が言葉を重ねる度に強くなっていく。
「ねぇ、起きなさいよ……起きてよ、霊耶……ねぇ……起きてって言ってるでしょッ！？　起きなさいよっ、さっさと起きなさいよッ！　寝た振りなんかしてないでさっさと起きなさいよォッ！　ねぇッ、霊耶ァアアッ！」
「……お嬢様を呼んで参ります」
自らが流す涙にも気付かずに霊耶を揺すり続ける霊夢に声をかけ、咲夜は姿を消した。
肩を揺すっていた霊夢だが、カラン、と霊耶の体から一本のナイフが落ちたのを見て、揺するのを止める。
やがて昨晩のレミリアの言葉、先ほどの光景を思い出し、自分が霊耶を攻撃したと理解した瞬間、
「……ィ……イヤァアアァァアアアァァアアアァァアアアァァ

アアアァァァアアアアアアァァァアアアアァァアアアアァァアアアア
ァァァアアアアアァァァアアアアァァアアアッ」

発狂したかのように頭を抱え、崩れ落ちた。

虚ろな瞳で霊耶を捉えながら、後悔では表せない程の感情が押し寄せてくる。

自分が、霊耶を殺した……？

護るはずだった霊耶を、自分の手で……？

私が……、

霊耶を――。

「…………霊耶……霊耶ぁ」

体を揺らすが、やはり反応はない。

「れい、や、ぁ……」

焼け焦げて黒ずんでいる服の裾を掴んで弱々しく揺する。しかし反応は変わらない。

目を瞑れば、走馬灯のように楽しかった霊耶との日々、そして止めどなく涙が流れた。

もう一度目を開けてみればやはり動かない霊耶と、色を失ったように温度や音や感覚など、何も感じない世界が広がっていた。

もちろん窓から見える景色は空の青、草木の緑。壁は紅と色は存在している。しかし自分にはそれらが『色』として認識できなかった。

もう何も聞こえない。

「……霊耶」

不意に口を開く霊夢。俯いたままで、表情は分からない。

「……今、貴方のいる場所はどんな所？」

呟くように放った言葉はあまりにも脆く儚い。普段の霊夢からは想像もつかない声。
少し間を開けて最後の言葉を紡やぐ。
しかし紡いだ言葉は相変わらず霊夢らしからぬ声色であり、
「……私も行って、いい……？」

恐ろしい程、たがの外れた声だった。
ゆっくりと、霊耶から落ちた一本のナイフを拾い自らの喉へと先端を向ける。
「……今、行くからね……？」
霊夢には幻想郷を守るため、大役とも言える程、重要な仕事がある。幻想郷を守らなくてはいけないという役目があっても、今の霊夢には自分の行動を抑制する材料にはならなかった。
霊耶へと微笑みかけ、一気にナイフを寄せた刹那――、

「……あら、小さな吸血鬼のお嬢様に運命を弄られて来てみれば、凄い事になってるわね」

聞き慣れない女性の声が部屋へと木霊した。
彼女は、突然の乱入者に呆然としている霊夢を無視して霊耶に歩み寄った。
「これは酷いわね」
良くここまで痛めつける鬼畜さがあったわね、と呟きつつ霊耶の胴体や四肢、至るところに触れる。
「ッアンタ！　霊耶に何してんのよ！」
我に返った霊夢がスペルカードを手に取って構えた。
そんな霊夢に彼女は霊耶に触れながら、背中越しで話しかける。
「紹介が遅れましたね、私は八意永琳。迷いの竹林にある永遠亭で

薬剤師をしています」
霊夢は、彼女の名前に違和感を覚えた。
やがて一つの結論を出した。
「八意……って事はアンタが霊耶の薬を作ってくれた『八意製薬』の人ね！？」
「という事は、服装から察するに貴女が博麗の巫女ですね？」
相変わらず背中越しの会話だが霊夢はスペルカードをしまい、永琳に話しかける。
「ええ。あの薬、本当にありがとう。あれがなかったらきっと、霊耶の笑顔は見れなかったわ」
感謝の意を込めて話す霊夢だが、表情は暗い。
「だけどもう、霊耶は……」
徐々に震え小さくなる声を霊夢には止める術がなかった。
永琳は霊耶を触る手を止め、視線のみを霊夢に向けた。
「彼が、博麗霊耶君ですね？」
霊夢は頷き、永琳に言われ事の顛末を話した。

話を聞いた永琳は、ため息を吐いて「保護者である貴女がそんなでどうするんですか」と叱り、やがてもう一度ため息を吐いて手に持っていた鞄を漁りだした。
鞄から顔を逸らさずそのまま霊夢に話しかける。
涙を隠す様に両手で顔を覆っていた霊夢だが、永琳の言葉に思わず顔を上げる。
「彼を救う方法が、二つだけあります」
「……えっ？」
永琳の言葉の意味が分からずに呆けた顔を向ける。

「ですから、彼を救う方法が二つだけあります」
鞄を漁っていた手を止めて霊夢に顔を向けた永琳は小さく微笑む。
永琳の言葉を理解した霊夢は目を見開いた。
「ホントにッ！？」
永琳の肩を掴んで真偽を確かめる。
霊夢の手を掴みやんわりと離してすぐに説明に入った。
「はい。一つは転生」
人指し指を上に向けて霊夢に見せる。
「転生？」
「幸い、霊耶君の魂はまだ身体と分離していません」
魂は死者の身体から分離すると三途の川へと向かい、そこから閻魔の下で審判が下され冥界に送られる、と説明を入れて永琳は言葉を続ける。
「ですから、あまり時間がありませんが霊耶君の身体と魂が分離した瞬間、用意した他の身体へと彼の魂を結合させます」
説明を聞いていた霊夢だが、不審な点が思い当たり訊ねた。
「つまり、霊耶は生き返るけど……今までの霊耶じゃない、他人って事ね？」
それならば確かに霊耶は生き返るが、それは瞼を閉じれば蘇る記憶に出てくる霊耶ではなく『博麗霊耶』という名の他人となってしまう。
転生の欠点。それは移し身となる体に対象者の魂を入れて蘇生させる方法。容姿は変わるが、高い確率で蘇生が叶うというメリット。
しかし当然、欠点も存在する。
一つは、容姿が変わってしまう。内面は同じでも外見が全くの別人になってしまう。二つ目は人格の混同。移し身にも当然ながらそれまでの人生があり、それに反映された記憶、性格がある。魂は無くとも肉体にそれらの想いが強く残っていると、転生した際に肉体に残った人格と新たに入り込んだ人格が混同してしまうのだ。そうなってしまうと転生は出来ても人格面に支障をきたし下手をすれば

全くの別人となってしまう可能性がある。
永琳は頷き、霊夢は辛そうな表情で舌打ちを溢す。
「もう一つの方法は？」
急かすようにもう一つの案を訊ねた。
「もう一つの方法は……」
しかし永琳は躊躇ったように口を閉じ、
「……コレを彼に飲ませます」
鞄の中から小さな試験管を取り出し、軽く振って入った液体を見せた。
「それを飲ませたらどうなるの？」
進んで飲みたいとは思わない色合いに僅かに顔をしかめた霊夢の疑問に、永琳は表情を曇らせる。
暫くの沈黙の後、錆びた歯車の様に重くゆっくりと開いた口から静かに言葉を紡ぎ出た。
「これは……」
彼に永遠の業を背負わせる――、
「蓬莱の秘薬……不老不死です」

日常の非日常～零～（前書き）

日常の非日常～零～

日常の非日常〜零〜

――身体が重い。
最初に思ったこと。
それに、焼けそうなくらい身体が熱い。何も見えない。
ここは、どこ？
景色はあらずどこまでも続いているような闇だったが、不意に一点の白い光が現れた。
それに吸い寄せられるように身体が動いていく。気持ち悪くも気持ち良く、抗いたくとも抗えない。
おかしな感覚だ。
あの光を目指せばまた、姉さんや魔理沙、フラン達に会えるのだろうか。
ふと、自分の言葉に違和感を感じた。
ん？　姉さん……魔理沙……フラン……？
誰だろう。
その間にも身体は光へと吸い寄せられていく。
光に近付くにつれ、自分の身体が姿を現してきた。
光は既に子供一人分程の大きさに見えるまで近付いていた。
不思議と眩しくはない。
けれど、意識とは裏腹に瞼が閉じていく。
それに比例し、徐々に何か音が聴こえてきた。
瞼が完全に閉じた時に聴こえた音は、声だったのかもしれない。
聴いたことがある様な、懐かしい様な、一番聞きたかった様なそんな声。
誰かが呼んでる……。
もう、起きなきゃ――。

日常の非日常（前書き）

日常の非日常。

日常の非日常

「霊耶、今日はいつも通りの魔理沙に、検診で永琳……そして珍しい事に、フランの同伴で中国だけじゃなくレミリアと咲夜が来るらしいわよ？」

眠っている弟の頭を撫でる。

雲一つ存在しない晴天の下、博麗神社の一室で霊夢が呟く。彼女の指だけでなく陽気な微風も霊耶の髪を悪戯に撫で、それが面白く霊夢はつい微笑んだ。

「今日はお天気もいいし、風が気持ちいいわよ」

朗らかな陽気に照らされて外に顔を向けながら話しかける。

彼女の言葉に応えるかのように、風が優しく二人の頬を撫でた。

優しい風が二人を包むようにそっと霊夢と霊耶の髪を揺らす。

不意に霊夢の顔から表情が消えた。

「だからお願い、目を覚ましてっ……」

次に聴こえてくるのは小さな嗚咽。

暖かな陽気も優しい風も、今の彼女にはただ悲しさを増加させる促進剤でしかなかった。

霊耶に泣き顔を見せまいと、霊夢は背中を向ける。

紅魔館の件から一週間、霊耶はずっと眠ったままだった。

あの日、フランとの件が治まった後で暇になりパチュリーに図書館へと案内してもらい、死んだら返すと言って大量の魔術書と共に先に帰った事を悔やんでか、お茶飲みと言って魔理沙が見舞いに、霊耶は能力が能力なため検診として永琳が毎日来ていた。

フランは二日に一度で訪れ、レミリアは次の日に顔を見せたきりだ。

彼女達もこの事態は目覚めが悪いのか、表情にこそ差はあるもの

の皆一様に苦痛の感情を浮かべていた。
霊夢は、霊耶がいつ起きてもいいようにと付きっきりで看病を続けている。
ほんの数日前は縁側で空を見上げながら他愛もないじゃれ合いをしていたのに。その思い出もやたらと遠い過去に感じる。
「……お昼御飯、作ってくるわね」
再び空を見上げると太陽は小さく、それが昼であることを示していた。
立ち上がり、どうせ今日も食べてはもらえないであろうご飯を作りに行こうとする霊夢。
優れない表情ではあるが、耳は優れていた。

「……ね、姉さ……ん……」

小さく掠れてはいるが千秋の想いで待ち焦がれた声が、風に運ばれて霊夢の耳に届いた。

「……霊、耶？」
不意の出来事に現実が受け止められないのか、振り返る事ができない霊夢。呆然と、弟の名を呟く。
「……姉さ、ん」
「――ッ霊耶！」
もう一度聞こえた懐かしい声に、霊夢は霊耶を抱きしめた。
「痛い、よ……姉さん」
霊耶の言葉が耳に入っていないのか、抱きしめながら弟の名前を呼び続ける。
「霊夢ー、お茶飲みに来たぜー！」
外から、口調で判断できる人物の声が聞こえてきたが、霊耶を抱きしめたままの霊夢。
次第に足音が近付いてくる。

「霊夢、いたなら返事してく――」
廊下からひょこっと顔を出した人物は、
「――霊耶……お前、起きて……」
霊耶を見て、固まった。
しかしすぐに動き出し、
「霊耶ぁあああ！」
走った勢いで落ちた帽子を無視して霊耶に詰め寄った。
「う、うぅ……苦し、い……」
当然、霊夢に抱きしめられている上に魔理沙にペチペチと音が鳴るほど身体を触られて、病み上がりである霊耶は顔を歪める。
しかしそんな霊耶に二人は気付かず、各々の行動に集中していた。
そんな中、
「……貴女達は、せっかく起きた人をまた永い眠りに就かせるつもりですか？」
廊下から薬剤師の呆れた声が届いた。
「え？　あっ、魔理沙！　霊耶が痛がってるじゃないの、さっさと離れなさいよ」
霊夢は隣にいた魔理沙を睨み付ける。
「おいおい。霊耶が痛がってるのは私じゃなく、起きたばかりなのに抱き締めていた霊夢のせいだろ？」
そんな霊夢を魔理沙は鼻で笑い、両手を仰いで首を横に振った。
「何、自分の事を棚に上げてるのよ」
「その言葉、そっくりそのままお返しするぜ」
「アンタねぇ……」
「何だ、やるか？」
スペルカードを取り出す二人。
「あっ……」
だが霊夢は、小さく声を漏らし握力のなくなった手からスペルカードが舞い落ちた。
「霊夢……」

自らの身体を抱え小さく震えている親友に、魔理沙はただ悲しそうに見つめるしかなかった。

大切な弟を死に追いやったスペルカード。
紅魔館の件の翌日、魔理沙が神社へと遊びに来ると、居間でテーブルの上に『霊符“夢想封印”』と書かれたスペルカードが置かれ、部屋の隅で自分の身体を抱え膝に顔を埋めながら震えている霊夢がいた。
魔理沙は駆け寄って話を聞くが要領を得ず、本人が持っていなきゃ意味がないためとりあえずテーブルに置かれていた彼女のスペルカードを差し出す。
「イヤァッ、それを近付けないでッ！」
悲鳴を上げながら弾き飛ばされた。
明らかにおかしい親友に話を聞こうとするがただ震えるばかりで、同時にある事に気付いた。
それは魔理沙が毎日ここに来る理由の一つである、
「……霊耶は、どこにいるんだ？」
魔理沙の言葉にビクッと肩を大きく揺らし、以降彼女の震えが大きくなった。
「なぁ、霊耶はどこにいるんだよ……おいッ、霊夢！」
その行動を見て不安に駆られた魔理沙が語尾を荒げつつも霊夢の肩に掴みかかり、顔を上げさせる。
「……霊耶は……」
霊夢が小さく呟く。
そこで見た霊夢の瞳はとても虚ろで。
――そして、
「私が、殺した」

おぞましい程の闇が広がっていた。

「……は？　今、何て言ったんだ？　上手く聞き取れなかったんだが」

あわ良くば聞き間違いであって欲しいと願う魔理沙に、もう一度霊夢が現実という残酷な言葉を紡ぐ。

「だから霊耶は……私が、殺したの……」

冗談であったとしても絶対に言ってはならない言葉に魔理沙は怒鳴りそうになるが、小さく聞こえてきた嗚咽によりその行動を止める。

その後、レミリア達が現れて霊夢を慰めつつも霊夢の言葉の真意を聞き魔理沙は励ます。霊夢を何とか普通に会話ができる状態にまで戻した。

そして永琳の治療が終わり自分の部屋で眠っている霊耶の見舞いをしてレミリア達は帰り、魔理沙は昨日から何も食べていないと言った霊夢に料理を作り、食べようとしない霊夢に半ば無理矢理食べさせる。

しかし夜になっても、自分を責めるように霊耶の側から離れない霊夢に、苛立った魔理沙が怒鳴りつけた。

「おい、霊夢。いつまでメソメソしている気だ？　自分を責めるなら行動で示せよ！　霊耶が起きた時もそんな顔をしてるつもりか！？」

「魔理、沙……」

呆然と霊耶から顔を上げた霊夢の腕を引き居間へと連れていった。そこで手を離し魔理沙は息を落ち着かせる。

「確かにお前のやった事は絶対にやっちゃいけない事だ。姉も家族も失格と言われても仕方ない事だ。それでも逃げないでお前が霊耶

にしてしまった罪を償いたいって思うなら、今すべき事は落ち込む事じゃないだろ？　起きるまで、そして起きてからの霊耶が苦しまないように、悲しませないように尽くしてやる事じゃないのか？」
優しく微笑む魔理沙を霊夢は暫く見つめ、
「……そう、ね」
ゆっくりと立ち上がり、
「これから霊耶が起きるってのに、落ち込んでる暇なんてなかったわ」
ありがとう、魔理沙、と少し影はあるものの彼女らしい綺麗な笑みを浮かべた。
そんな霊夢に魔理沙も満面の笑みを返す。
「それじゃあ霊耶がいつ起きてもいいように、霊耶の部屋に行くとするか！」

それ以来、先日の姿が嘘じゃないのかと疑うほど精力的にご飯や掃除など、霊耶の周りの世話をしながら看病をしていた。
だがスペルカードだけは、
「ごめんなさい、まだ魔理沙が持っていて……」
辛そうな顔で拒絶していた。そして昨日、五日目にしてようやくスペルカードを受け取ったのだ。
しかし辛そうな顔は変わらず、今日、先ほどの魔理沙との件でスペルカードを手にしたのは、霊耶が目覚めた事に安堵し余裕があったからかもしれない。
「それでは診ますので、まず服を上げて下さい」

震えている霊夢をよそに永琳が聴診器を耳に当て、霊耶の横に正座をした。
「え？　あ、あの……どちら様でしょうか……？」
当然、見知らぬ人にそんな事を言われ困惑する霊耶。
「そういえば面と向かって会うのは初めてでしたね。私は迷いの竹林で薬剤師をしている八意永琳といいます」
頭を下げる永琳に「こ、こちらこそ」と霊耶も頭を下げた。
頭を上げた霊耶は、恐る恐るといった表情で永琳に話しかける。
「あ、あの……それで、八意さんは何故、ここにいるんでしょうか……？」
「そうですねぇ……霊耶君が、実け――患者だから、ですね」
微笑みを浮かべる永琳に何故か冷や汗をかきつつも、彼女から紅魔館で倒れて一週間も目を覚まさなかった、など色々と教えてもらい納得したのか、少し恥ずかしそうに服を上げた。
「それでは診察の方、始めさせて頂きます」
耳に当てた聴診器を霊耶の胸部に当て、静かに目を閉じる。
霊耶としては今まで会った事のないタイプの、大人の色香を醸すこの女性に、意味もなくどぎまぎしていた。
「……あら、少し心拍数が高いですね」
「な、何でもありません！」

「特に異状はありませんので、普段通りの生活を送っても問題ありません」
そう言って診察道具を鞄にしまう。
霊耶は永琳の言葉に安堵のため息を吐くと同時に、一つの疑問が浮かんだ。
「……そういえば僕、家で寝てるんだろ」
確か紅魔館にいたはず、と呟いた霊耶に霊夢と魔理沙は肩を震わせ、永琳は小さく眉を動かす。
「……霊耶」

絶賛苦悩中の霊耶に霊夢が話しかけた。
「貴方は紅魔館で――」
霊夢は一瞬の躊躇いを見せた後、
「私に殺されたのよ」
「……えっ？」
霊夢の言葉を理解できなかく呆けた表情で声を出した霊耶だが、すぐに「あっ」と小さく呟いた。
「確か、姉さんと咲夜さんが弾幕ごっこをしてて……」
霊耶は霊夢へと顔を向けた。
「……ッ」
霊夢は思わず顔を逸らしそうになったが何とか堪えた。
霊耶は暫く霊夢を見つめ、嬉しそうに笑みを浮かべた。
「……良かった。姉さん、怪我はなかったみたいだね」

「――ッ」

「霊夢ッ！？」
魔理沙の声と同時に、霊耶の頬に乾いた音が響いた。
霊耶は唖然としながら頬を押さえ、流れる涙を隠そうともせずに肩を震わせる霊夢を見た。
「姉、さん……？」
霊耶は信じられない事が起きたような顔で霊夢を見る。
今まで散々愚痴や怒られたりはしたが、一度も手を出された事がなかったからだ。
しかし、同時にこう思った。
――自分が軽はずみな事を言ってしまった、と。
霊耶自身、先ほどの言葉に怒る部分はなかったが、霊夢には残酷な言葉として聞こえたのだと理解し、
「……ごめんなさい」
頭を下げた。

「……霊耶」
霊夢の言葉に頭を上げると、
「……ごめんね、痛かったでしょ？」
霊夢は霊耶の頬に優しく触れた。
「だけど……」
霊耶の頭の後ろに手を回しそっと引き寄せ、優しく胸に抱える。
「お願いだからもう、自分の命を捨てるような真似はしないで。貴方は私の大切な弟なんだから」
「姉さん……」
霊耶は震えている姉の身体を、
「……うん」
そっと抱きしめた。

「私達、完全に忘れられてないか？」
「そうですね。ですが、それはそうと……」
永琳は咳払いをして、二人を離した。
「霊耶君、貴方には言わなければならない事があります」
「何ですか？」
首を傾げる霊耶に永琳は、霊夢からの険しい視線を無視して言葉を紡ぐ。
「……貴方の身体は、不完全ながらも不老不死になっています」
「……不老不死？」
「はい。霊耶君の身体は、不完全ながらも不老不死になっています」
「えっ、不老不死？　不完全？」
全くもってついていけない話に、霊耶はただ言葉を聞き返すしかできなかった。
そんな霊耶を見て、真剣な表情の永琳が説明をする。

「先程お姉さんから話された通り霊耶君は、彼女等の弾幕に被弾して死にました」
「はい」
頷く霊耶だったが、ここで、ようやくと言える疑問が浮かんだ。
「じゃあ何で、僕は生きて……」
「……それは霊耶君を生き返らせて欲しいとお姉さんから頼まれて、蓬莱の秘薬……つまり、不老不死の薬を貴方に飲ませたからです」
「じゃあ僕はもう、死ぬ事も老いる事もないって事ですか……？」
霊耶の言葉に永琳は「はい」と頷くが、すぐに言葉を繋げる。
「病気や永寿を全うして死ぬ事はありません。しかし何らかの外部的攻撃、損傷……平たく言えば、怪我をすれば死ぬという事です」
「……だから『不完全』な不老不死なんですね」
永琳の言葉に冷静に返す霊耶。
「はい。詳しい事は解りませんが、恐らく霊耶君の持つ能力が関係していると思います」
そう言って立ち上がろうとする永琳に霊耶は「そうですか」と頷き、

「ありがとうございました」

誠心誠意のお礼を述べた。
「お礼なんて構いませんよ、私は医者として患者に尽くしただけです。それに」
不完全とは言え貴方に永遠の業を背負わせてしまいました、と辛そうに目を伏せ呟いた。
「永遠の業？」
頭を上げた霊耶が首を傾げる。
「貴方は人間ですから、長くても余命八十年程。しかし不老不死になってしまえば死ぬ事もない、つまり知っている者が死んでゆくのをただ見るしかない……孤独という業を背負わせてしまいました」

仕方ないとはいえ申し訳ありませんでした、と頭を下げる永琳に
「頭を上げて下さい」と霊耶が声をかけた。
「例えそうだとしても、僕は貴女にお礼が言いたいです」
霊耶の言葉に驚きの表情を浮かべる永琳。
「……それは何故ですか？」
永琳に霊耶は嬉しそうに笑みを浮かべた。
「だって、今までできなかった姉さんの手伝いや魔理沙の家に遊びに行ったり、歩くだけじゃなく走ったり散歩だってできるようになったんですよ？　もし姉さんや魔理沙が僕より先に死んでしまっても、凄く悲しいけど孤独とは思いません」
霊耶は、永琳と霊耶の話を呆気に取られたような顔で聞いている霊夢と魔理沙に顔を向けた。
「二人は永遠に僕の心の中に生き続けています」
……大切な人なんですから。
霊耶の言葉に、
「ははっ、何かムズ痒いぜ……」
魔理沙は恥ずかしそうに頬をかき、
「霊耶……」
霊夢は両手で口を押さえ、涙を隠さずに弟の名を呟く。
永琳は呆気に取られたような表情で「貴方って人は……」と呟いたが、すぐに小さく笑みを浮かべた。
「どうやら、私の心配は無用だったみたいですね」
それではお大事に、と頭を下げて部屋を後にする永琳を霊耶が呼び止めた。
「どうしましたか？」
「いえ、一つ訊きたい事があって……」
「訊きたい事、ですか？」
「はい。今度、八意さんがすんでいる永遠亭、に行ってもいいですか？　診察してもらったお礼もしたいので」
お礼などいいと断る永琳だが霊耶が一向に引こうとはしないため、

小さくため息を吐いた。
「……それでは迷いの竹林の案内人に貴方の事を伝えておきますので彼女に案内して貰い、お越し下さい」
はい、と嬉しそうに微笑む霊耶に再びため息を吐きながらも微笑み、思い出したように話しかけた。
「それと、私の事は名前で呼んで頂いて構いませんよ」
名字で呼ばれるのは不馴れなもので、と永琳。
霊耶は少し躊躇いを見せたが何とか頷く。
「分かりました、永琳さん」
それでは、と微笑みを残し永琳は博麗神社を後にした。

永琳が帰り暫くして、感無量となった霊夢が霊耶に抱きついたりしている内に夜となり「腹が減ったからご馳走になってくぜ」という魔理沙の言葉で二人もようやく自分が空腹という事に気付いた。
「ほら霊耶、まだ包丁は危ないからこれでじゃがいもを剥いて」
早速、手伝いをかって出た霊耶は霊夢に教わりながら、初めての調理を体験していた。霊夢の言葉に頷き道具を受け取った霊耶は、楽しそうにじゃがいもの皮を剥いていく。
「いつも姉さんの料理の下準備に対する愚痴と後ろ姿を見てて面白くないのかなって思ってたけど、料理作るのって楽しいね」
「うっさい。一人だとめんどくさいのよ」
「じゃあこれからは、僕も手伝えるから楽になるね」
笑顔で話す霊耶に霊夢は、包丁を動かすのを止めため息を吐く。
「ダメよ。いくら不老不死になったって言っても怪我したら危ないんだから、毎日なんてやらせるわけないじゃない」
医者を呼ぶにもそれなりにお金がかかるのよ、と再び野菜を切り出した。
霊夢の言葉に「ちぇっ」と口を尖らせる霊耶だが、不意に「あっ」

と声を漏らす。
「どうしたの？　霊――」
振り向く霊夢だったが、その光景を見て絶句した。
そこには、
頸動脈から血が吹き出している霊耶がいた。
「手、切っちゃった……」
「助けて！　えーりん！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2125y/

東方幻想境

2011年11月23日15時48分発行